

第二章 桶狭間から黄乱の地へ

能の第二幕が開き、ポンッと小気味よい鼓が鳴った。滑稽なほど着ふとりした信長が、舞台の中央にすすむ。

次の瞬間、馬蹄が鳴り響いた。赤い母衣を背負った完全武装の騎馬武者が、もう一頭の騎手を乗せていない葦毛の馬をつれて舞台の袖までやってきた。

黒塗りの鎧を小脇に抱えた屈強の侍。吊りあがった眼は血走り、まるで燃えているようにも見える。赤母衣衆筆頭、鎧三本の伊東清蔵だ。

「何事か！」

諸将が無礼な騎馬武者を怒鳴る。信長子飼いの赤母衣衆でなければ、その場で斬られてもおかしくないほどの行動だ。

だが、伊東清蔵は、気にするそぶりもなく、舞台の信長と諸将の前に馬を進めた。よく見れば、連れてきている葦毛の馬は信長の愛馬である。

「今川軍本隊は、田楽桶狭間にて具足を脱いで休息中、これより信長様は我ら赤、黒、両母衣衆とともに切り込みをかける」

赤母衣の騎馬武者伊東清蔵が叫んだ。

ざわりと舞台を囲む諸将に動揺が走った。

「伊東、それは信長様の下知ではあるまい。功をはやり、主君の命を偽るなど、もつてのほか。ひっ捕らえろ！」

老将が怒鳴り、何人かの武者が伊東清蔵を囲んだ。

「清蔵、御苦労」

能面の信長が声を発した。伊東清蔵を囲む武者の足がピタリと止まる。それまで、どんなに重要な報告が届けられても一声も発さずに踊り続けた男の声は、陣屋にいる全ての諸将の注意を引きつけた。

バサリと衣装をぬぎ、能面をひきはがした。

そこには、漆黒に輝く南蛮胴を着込んだ信長がいた。すぐに小姓がかける。織田木瓜の家紋が入った西洋式の籠手や具足を装着する。そし

て腰には、漆黒の鞆に納まった備前長船光忠と朱と金箔で彩られた豪華な鞆に納まった脇差、不動行光。最後に紅いビロードのマントをはおった。

「法螺を吹け！ 出陣する」

信長が叫んだ瞬間、諸将が狼狽しながら散った。籠城と見越していた彼らの部隊のなかには、満足に兵装を整えていないものもいたのだ。みな信長の性格は知っている。ついてこれないものは、置いていく。そして、戦後には過酷な罰が下されるのだ。

桶を蹴飛ばし、旗差しを落とす大混乱の中、信長は舞台の上の楽士たちに指示を出した。混乱の中に、上品な音色が響きわたる。

「信長様」

伊東清蔵の眉に皺がよる。

「最後の舞になるやもしれぬ。少しだけ時間をくれ」

不思議なくらい優しい調子の声だった。かつての信長は、親しい者にはそういう声をかけられる男だった。厳しい中に、潜む繊細な部分。前田又左や伊東清蔵たちは、そんな信長に惚れたのだった。しかし、実の血を分けた母や弟の裏切りなど、下剋上の日本では当たり前前の骨肉の争いをへるうち、いつしか信長はそんな優しさを見せることがなくなってしまった。

鼓が鳴った。その調子から、伊東は信長が敦盛のある部分を舞うのだとわかった。信長が最も愛した一節で、人間のはかなさを唄った部分だ。

人間五十年、化天の内をくらぶれば、
ゆめ幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか

ポンつと鳴り響く鼓が、舞の時間の終了を告げた。舞台から愛馬に飛び乗る信長。ピカリと空が光った。そして、すぐに大地を揺るがす大音響が響いた。楽者たちは思わず手を耳にやり、眼をつぶった。

恐る恐る、楽者たちが目をあけると、もうそこには信長たちの姿はなかった。

空は、いつのまにか厚い雲に覆われていた。湿気を含んだ空気が、すぐ後に豪雨を連れてくることを告げていた。

大地を殴るような大雨の中、ビロードのマントを背負った騎馬武者が、弦から放たれた矢じりのように野を突き進む。

右手から赤い母衣をまとった赤母衣衆十騎、左手から黒い母衣をまとった黒母衣衆十騎がビロードの矢じりと合流して、赤と黒の弾丸と化す。右手の赤母衣衆の先頭には、鎧二本こと伊東清蔵。左手の黒母衣衆の先頭には、がっちりとした体付きの男が馬を操っている。年のころは三十代前半だろうか。十代後半や二十代前半で構成される母衣衆の中では、随分と老けてみえる。

異様なのは背負った刀だ。普通の太刀は刃渡りが二尺（六十センチ）程度が標準だが、この男の背負う太刀は柄の部分だけでそれぐらいは優にある。刃長にいたっては、五尺（百五十センチ）もあり、柄と合わせると二メートルを超える。

これは野太刀、大太刀と呼ばれる武器だ。刃長が三尺以上のものをそう呼び、あの宮本武蔵と対決した佐々木小次郎の物干し竿の異名をとる刀も、この野太刀だったと言われている。この一振りで、太刀としてはもちろん、鎧としても長巻（薙刀）としても活用できると、流れの雑兵たちが愛用したことで知られている。

この野太刀を背負う男は、赤黒両母衣衆最年長の河尻与兵衛。かつては信長やその父信秀と激闘を繰り広げた、清州衆の部下だったという過去を持つ男だ。どんな危機にも冷静沈着な闘いぶりに定評がある。今では黒母衣衆筆頭として信長の期待を一身に背負う立場だ。実際に、この二十年後の武田氏攻めで活躍し、甲斐国と諏訪郡を統べる大名にまで出世することになる。

「信長様、少し速過ぎます。後続がついてきてません」

河尻が馬を寄せて、信長に進言する。

「この速度は足手まといを振り落とすため。河尻のじい様は、甘すぎる」
赤母衣衆の長谷川橋介が、信長が答えるより先に口を出す。若い母衣衆にあつて、三十代の河尻は「じい様」という仇名で呼ばれているのだ。

長谷川の言葉を受けて、信長の乗る馬の速度がさらに増した。時に信長は家臣の質問に答えないことがある。代わりに、今回のように行動で示す。信長の乗る馬の速度が、足手まといは捨てていけと命じている。

「いくら、なんでも少なすぎます。不意をついても、義元の首には届かない」

そう怒鳴るように進言する河尻の声を落雷が打ち消した。

オオウという歓声が、背後の赤黒両母衣衆から上がった。

雨煙を突き破るように信長たちの集団に迫いすぎる騎馬武者の集団が現れたのだ。彼らは整然と、それでいて前方や側方にいる味方さえも弾き飛ばしかねない勢いで猛追してくる。

「誰だ！」

後も見ずに信長が問う。

「十字鎧、森可成殿」

黒母衣衆の最後尾が声を上げる。

織田軍中随一の遣い手の登場に、母衣衆から歓声が上がる。

森の騎馬軍団は、ピタリと赤黒両母衣衆の後につけた。

スルスルとひとりの騎馬武者が先頭へと上がっていく。右脇に白銀の十字鎧をかかえた森可成だ。赤毛の駿馬を駆け、赤胴色の鎧を着込み、鹿の角をあしらった兜に般若の面頬をつけている。

信長の横まで馬をすすめ、般若の面頬を取る。眼尻に皺を浮かべて、信長に笑いかけた。

「信長様、女に浮気された気分だ。隠し事は不和、不縁のもとですぞ」
チラリと森可成を見た信長、西洋兜の隙間から見える顔は、ほんの少

しだけ笑っているように見える。だが、そんな表情を見せたのは一瞬だった。急に信長の顔が強張ったのが、兜ごしにもわかった。

雨を切り裂くように、一騎の武者がかけてくる。背には朱鎧。前田又左だ。

「信長さまあ、加勢に駆けつけました」

又左の声を聞き、赤、黒両母衣衆に動揺が走る。前田又左は追放中の身、信長の意向ひとつで打ち首にされてもおかしくはないのだ。

「空気の読めない野郎だ」

森可成が舌うちする。

「信長様、又左は過去に落ち度あれど、その忠心はまことのもの。お目こぼしを」

伊東清蔵が、信長に進言する。

信長は馬に鞭をいれて、速度を増す。それは、前田又左をひきはなすようにも見えた。

抜刀術の長谷川橋介が信長のすぐ後ろまで、馬を進める。

「清蔵黙れ。下剋上の世、例え敵意なくても、軍規を乱すものは厳罰に処すべし」

長谷川橋介の冷たい声が飛ぶ。

そんなやり取りも知らずに、ぐんぐんと近づいてくる前田又左。距離を縮めるたびに、赤黒両母衣衆に動揺が増す。みな、信長の下知を待っていた。許すのか、斬るのか。

「長谷川」

信長が冷たい声を発した。

「……。はい」

それ以上に冷たい声の長谷川橋介。

「お前に、任せる」

長谷川橋介は、馬を反転させた。

「馬鹿野郎が、軍の隅っこにいりやよかったものを。なあ清蔵」

森可成は般若の面頬をつけなおした。そこからは何の表情も読み取れない。問われた伊東清蔵は、森可成の面頬よりも険しい表情でずっと前を見つめている。これから、背後で起こるであろう惨劇の予想が、自然と彼らの表情を険しくさせていた。

「橋介」

名前を呼ばれた子犬のような笑顔を長谷川に向ける又左。見ると背中にひとりの男を乗せている。流れの忍者、石川文吾だ。先ほどまでの山伏姿ではなく、鎖帷子に黒装束という格好をしている。鋼の当世具足を身にまとった母衣衆に比べると頼りない装備だが、その分俊敏さを感じさせる。

「旦那やばくねえか。あれは、やるときの目だぜ」

後に乗る流れの忍者文吾の忠告も、又左には聞こえないようだ。

長谷川橋介は、馬上で腰だめの体勢をとる。それを見て、又左の表情が変わった。

「ちがう、俺は味方だ」

長谷川橋介の顔に浮かんだ嘲笑が、又左の声が耳に届いたことを教えた。しかし、馬の速度を落とさず、腰の刀を抜き放った。

又左の両手は手綱を握っている。斬撃をかわせる道理はなかった。

しかし、長谷川橋介の放った白刃は、又左の首の少し手前で失速した。撃ち落としたのは、黒母衣衆筆頭の河尻与兵衛の野太刀。二メートルを超す刀の先がわずかにかすり、長谷川橋介の斬撃の軌道を変えていた。舌うちしてまた、馬を反転させて又左に迫いする長谷川橋介。又左と橋介の間に割って入ったのが、またも河尻与兵衛だった。

馬体がぶつかる距離で走る三騎。

「河尻のじい様、軍令違反ですぞ」

「馬が急に言うことをきかなくなった。信長様の命令に背くつもりはない」

仏頂面で答える河尻与兵衛。

「子供の言い訳か。俺の抜刀術なら、あんたごしに又左を斬ることもできる。それを承知の上での行動か」

残酷な笑みを浮かべる長谷川橋介。まるで、邪魔に入ってくれたことを喜んでいるようにも見える。

太刀を鞘にしまい、再び抜刀術の構えを見せる。鞘にしまったからといって、決して斬るのを諦めたわけではない。威合は鞘内の勝負と言われるように、鞘に納めた状態からの斬撃に最大にして最速の威力を秘める。又左だけでなく、河尻与兵衛も一緒に斬るつもりなのだ。ひとり斬るよりもふたり、ふたり斬るよりも三人、そんなことに喜びを見いだす男もいるのだ。

「俺を斬れという命令はあったか？ 又左を斬るのは勝手だが、俺まで斬ったら、今度はお前が又左の立場になるぞ」

河尻は落ち着いたものだ。だが、内心では背中に冷や汗が流れるのも感じている。屁理屈はこねたものの、信長の命令に背いているのは事実だ。信長ならば、一緒に斬れとも言いかねない。

「口ばかり達者な爺だぜ。信長様、又左とそれをかばう河尻殿を成敗するが、よろしいか」

長谷川橋介は騎馬軍団の先頭に怒鳴った。

信長は後を振りかえない。全員の視線が信長の背中に集まる。

長谷川め、なんてことを言いやがる。

そう全員が思っている。もし、ここで又左と河尻を許せば信長の株は落ちる。自分が命令した内容を覆すわけだからだ。下剋上の世で、こういった判断は優柔不断とみなされ臣下から舐められるもどだ。かといって、河尻ごと斬れば戦力と士気の低下はまぬがれない。

そして、そんな動揺する同僚たちを何より面白がって見ているのが、長谷川橋介という男なのだ。

「これ以上、近づくようなら、ふたりとも斬れ」

前を向いたまま、振り向きもせず信長は答えた。小さいが、不思議とよく通る声だった。

ホッと胸を撫で下ろす武者たち。舌うちして長谷川は又左と河尻から離れて、疾走する騎馬集団へと合流した。

「又左、後方で控えろ。ここで手柄をたてれば、殿の気も変わる」
並走しながら河尻が説得する。お互いの馬が散らす土砂が、ふたりの華美な鎧をどんどん汚していく。

「そうだぜ、旦那、さっきは俺まで殺されるところだったんだ。そうしよう」

背後にいる文吾もなだめる。

「いやだ、殿に万が一のときがあれば俺が助けてやりたい」

又左は反論するが、その言葉に今までのような力がなかった。

「くどいぞ、お前がこれ以上近づいたら俺も一緒に斬られる」

河尻が叱るように、言い聞かせる。

「信長様、お願いです。側にいさせてください」

土砂と、騎馬の蹄の音が乱れちる中、又左は吠えた。それは最後の力を振り絞るような苦しさをもなった声だった。

すると、それまで無反応だった信長がこちらをクルリと振り返った。降りしきる雨を蒸発させるような熱い戦闘心とは別に、その眼光は冷え切っていた。その眼を見て、又左は二の句を継げなかった。

急に又左の馬の速度が落ちる。母衣集団から、ズルズルと脱落するようになり引き離されていく。首はうなだれて、手綱を掴む両腕は今にもダラリと垂れさがりそうだった。

後続に続く森可成の騎馬隊が又左たちを追い抜く。集団が跳ね上げる泥が、又左の顔を汚した。

その時だった、突然大きな稲光が、信長たちを襲った。

まるで瀑布のような巨大な稲妻が、轟音をたてながら龍のように蛇行

して集団を飲み込んだ。

強烈な光と音で、一瞬のうちに眼と耳が麻痺した。

光と音がほぼ同時だった。どうやら、すぐ前方で雷が落ちたようだ。鞍から伝わる振動で、馬がまだ走っていることだけはわかる。視界も聴覚もまだ治らない。ただ、視界は真白で耳はキーンと鳴っているだけだ。肌を打つ雨と臓腑を揺らす馬蹄だけが、この世と自分たちをつなぎとめる頼りない糸だった。

最初に戻ったのは、聴覚だった。

馬蹄の轟き、その間からわずかに不吉な音が漏れ響く。殺気だった男たちの喊声、鉄と鉄とが打ち合い軋む音。奇妙だ。まだ戦場は先のはずだ。あるいは感覚が麻痺している間に、ずっと時間がたってしまったのだろうか。皆がそんなことを考えている間に、徐々に視界が戻ってきた。

打ちつける豪雨、空には雷が龍のように泳いでいる。

背後に急速に流れる木立。

何かがおかしい。

「止まれい」

般若の面をつけた森可成が、騎馬集団の前に立ちふさがった。

信長の愛馬が前足を跳ね上げる。何人かの母衣衆は、突然のことに馬から転げ落ちた。

「何をする可成」

信長が怒鳴った。

「信長様、何か奇妙です」

戦場でも軽口をたたく森可成が、いつにない緊迫した雰囲気を読まわしている。

「回りを見てください。こんな風景見覚えがありますか」

般若の面から、か細い声が漏れる。

騎馬集団がざわついた。

尾張では考えられないほど広い荒野。幼いころから生まれ育った尾張の土地のどんどこところにも、こんな場所はない。

「どういうことだ」

つぶやく信長に河尻与兵衛が馬を寄せる。そして、顔を近づけた。

「信長様、ゆつくりと後を振り向いてください。決して、動揺しないように」

「どういふこ……」

振り向いた信長が言葉を呑んだ。

後には、赤母衣衆、そして黒母衣衆の合計二十騎がいる。そして、少し間をおいて、前田又左。そして、その後には誰もいなかった。厚みのある行軍で加勢にきた森可成の騎馬軍団も、バラバラと統制を乱しながら何とかついてきていた諸将の軍団も。

信長と森可成、赤黒母衣衆の二十人、そして前田又左と透波石川文吾、あとは誰もいない。ただ荒野が続いているだけだ。

信長の動揺はすぐに集団に伝わった。

「どういふことだ、俺たちは桶狭間に向かっているんじゃないか」

「どうして、他の人間が消えたんだ」

「今川軍にやられたんじゃない……」

「いや、きつとあの雷に打たれてみんな死んでしまったんだ」

口ぐちに不安を言う騎馬武者たち。どんな強敵にも、どんな大軍にも、ひるまない彼らが怯えていた。

また、空に雷が舞った。

キーンと金属が共鳴するような音が全員の前の中に響いた。

「儼々公棕泣俣涓嬰竟銕」

「逕々蛇纏阪縛励」

「傷銕々儼鎔併伍銕側銕」

奇妙な声が、騎馬武者たちの口から洩れた。まるで、違う国の言葉のように、違和感のある響き。

「貴様ら、何を言っておる。ちゃんと喋れ」

河尻が怒鳴る。

が、怒鳴っている自分の声が、まるで自分の言葉でないような不思議な感覚に陥る。

動揺する兵たちを静めるため、また怒鳴ろうとした、その時だった。

「今鉢燵俗剌嬰亮鉢燵鉢」

河尻は自分の口を覆った。

兵たちに喝をいれるために開いた言葉が、全く自分でも予期しない、聞いたこともない言葉だったからだ。

また、宙で雷が龍のように舞った。

再び、金属が共鳴する不快な響きが頭の中を駆け廻る。さつきよりもずっと強い不快な響き。

何人かの武者が落馬した。それでも、なお音は鳴りやまない。落馬した武者は頭を抱えてもがいている。きつとどんな拷問を受けても、こんな醜態を見せることがないだろう。それほどまでに頭に響く音は苦痛だった。バタバタと武者が地面に落ちる。信長、河尻与兵衛、伊東清蔵、長谷川橋介、森可成らは何とか落馬を免れた。

一体どれくらい時間がたっただろうか。

耳鳴りがやんだ。

雨が地面を打つ音や鎧がきしむ音が、正常に聞こえていた。

「何だったんだ、今のは」

信長がつぶやいた時、轟音が響いた。

それは、さつきまでの人知を超えた音ではなかった。今、轟く音は信長もよく知っているものだった。兵馬が突撃を開始する大音響だ。人馬が活動し刀剣がきしむ音が、丘の向こうから聞こえる。

戦場の音を聞いて、母衣衆は理性を取り戻した。すぐさま、地面から跳ね起き、馬上の人となる。

「信長様」

吊りあがった眼尻の伊東清藏が信長の下知を請うた。

「やるしかなかるう、もともと勝ち目の薄い博打だ。敵陣に突撃するのみ」

言うなり信長は駆けた。馬上で白刃をひらめかせる。

「おお」

と喚声をあげて続く、赤黒両母衣衆。

少し遅れて、森可成。まるで若武者の背後を守るように、騎馬を走らせる。

「旦那、まさか一緒に突撃する気じゃないだろうな」

又左の馬の上で心配そうに、つぶやく文吾。

「残念ながら、そのまさかだな」

言葉を聞いて、文吾が馬から飛び降りる。

「文吾、ここが別れか。まあ、この数じゃ、どんなに今川軍が油断してても返り討ちは間違いないがな。今まで感謝してるぜ」

「あんたら、馬鹿か。本当に今川と戦えると思ってるのかい」

「どういうことだ」

「俺が思うに、ここは尾張なんかじゃねえ。いや、日本でさえもないかもしれない。俺は、視力が回復してから、ずっと回りを見てたんだ。小屋が何軒かあったが、どれも見たこともない意匠や構造だった。俺は日本中を旅したが、あんなの今まで見たことがねえ」

「へー、義元の野郎、俺らを恐れるあまり、妖術でどっか別の世界に飛ばしたというわけか」

呑気に答える又左。

「笑いごとじゃねえぞ」

「ここがどんな世界だろうと、することは変わりやしねえよ。俺は信長様と一緒に闘うだけさ。お前は どうするよ」

「うーん、まあ、そう言われたら、どうしたらいいかはわかんねえなあ」

「なら、もう少し俺につきあえよ。幸い、お前さんが狙ってた典太光世

はこの通り、俺の腰に健在だ。いい働きをすりやかれてやるよ」

そう言つて、又左は馬を走らせた。

「俺は透波だ。情報収集が仕事。殺し合いはあんたらに任せるぜ」

「おう、まだ狼煙は残つてるだろう。生きてたら、お互いに場所を知らせようや」

又左は朱の大身鎧を振った。振り向くと、もう文吾はどこかに消えていた。

馬に鞭をいれて、赤と黒の集団を追いつがる前田又左。

母衣衆は今までの動揺が嘘のように、精悍に疾走する。例え今の状況がどうあれ、戦わなければいけないという状況が、戦国の世に生まれた彼らには何よりの活力を与えた。自分の信じていた親兄弟に寝首をかかれることも少なくない下剋上の世界、敵味方の区別がつく戦場など、彼らにとっては遊び場のような親しささえ感じるのだ。

伊東清蔵、河尻与兵衛の赤黒両母衣衆筆頭のふたりを先鋒に、信長の騎馬団は丘の上へと上り詰めた。

丘の上には、彼らの予想を覆す光景が広がっていた。

そこは、多くの死体が野原を埋め尽くす戦場跡だった。ついさっきまで、戦闘が行われていたのだろう。矢が刺さった死体からは、血が間欠泉のように流れている。ところどころから呻き声のようなものも聞こえてくる。

信長たちはゆつくりと馬を歩ませながら、死体の中へと入っていった。

「なんだ、こりゃ」

伊東清蔵がうめくように呟いた。

折り重なる死体は、今川軍のものでも織田軍のものでもなかった。いや、それは日本のどこの兵隊のものでもない。鎧は鉄砲戦を考えて鋼鉄の一枚胴が主流の信長軍と違い、牛の革や木の札なめしたものを魚の鱗のように並べている。その魚鱗の札に薄い鉄がついた甲冑を着た兵士も

いたが、数は圧倒的に少なかった。鉄製の鎧はまれで、どうやら將軍職などの高級な戦士しか着ていないようだ。鎧の下に着衣も信長たちとは違うようだ。よく似てはいるが、どこか違う。

そして、武器。鉄製の武器を皆持っていたが、その形はやはり違う。

「元寇の武器や装備に似ているな」

信長がポツリと呟いた。

鎌倉幕府の時代にモンゴル軍が日本を襲った元寇の役を伝える絵巻物などを見たことが信長はあった。確かに鎧兜の造りなどは日本のものというより、その絵巻物で見たモンゴルの軍隊のものに似ているように思える。

「元は中国の北方の平原が本拠地ですよ。なんで、尾張にそんな奴らがいるんですか」

「いや、俺たちが元の本拠地の平原にいるということも考えられる」
信長が冷静に呟いた。

そうなのだ、皆子供のころから尾張中を駆け廻っている。彼らの知らない場所などはない。だが、今自分たちがいる場所は違う。尾張のどこにもこんな風景の地はない。

「きつと、ここは元でもなさそうですね」

森可成が、一頭の軍馬を指差した。

息絶えた主を人形のように乗せて、悲しそうにいなないている軍馬がいる。

「なぜ、元でもないとわかるんです」

伊東清蔵が怪訝そうな顔をして聞いた。

「鞍と兵士の足元を見てみる。鎧がないだろう。俺の曾祖父も元寇に出陣したらしいが、その時打ち取った騎馬武者の鞍が家にあるんだが、そこにはちゃんと鎧があった。奇妙じゃないか、鎧がない騎馬武者なんて足軽が素足で戦場に行くようなもんだぜ」

確かに、言われてみると鎧と呼ばれる足をひっかける部分がない。騎

乗中に体のバランスをとる大変重要な道具だ。鞍の構造からして、戦闘で外れたのではなく、もともと鎧というものをつける発想自体がなさそうだった。

信長たちは、馬から降りた。

死体のひとつから、剣を取り上げた。

これも信長たちが持つものと違う。片手で扱うことを考えた束の短さ、そして反りあがった片刃の太刀ではなく、まっすぐな両刃の剣だ。

森可成がしげしげと剣を眺める。よく見ると、その輝きも違う。

「これは、鑄造の剣じゃねえか。今どき、こんなもので殺し合いをやってる国なんかねえぞ」

彼らが持つ太刀、日本刀と言われるものは全て鍛造のものである。折り返し鍛練法と呼ばれる日本刀独特の製法で、鍛冶屋が熱い鉄塊を叩いて長く薄くして、さらにそれを折りたたんで短く厚くして、それをさらに叩いて長く薄くする。そんな気の遠くなるような作業を何度も繰り返して、極限まで切れ味鋭い刀に仕上げている。一方、鑄造とは、剣の形をした鑄型にとかした鉄を流しこんでつくる。彼らからしてみれば鑄造の剣など玩具のようなもので、武器のうちに入らない。

何かが微妙に違っている。衣服の様子が違うくらいなら、何とか説明はできる。頻繁ににではないが、彼らも中国人の商人を見たこともあるし、何人かは堺の貿易港で南蛮人を見たものもある。しかし、着ている鎧や騎馬の鎧、彼らが持っている武具はどうしても説明ができない。生き死にがかかる場面で、なぜ時代遅れの装備を身につけるのか。それは彼らにひとつのことを想像させた。時代遅れの装備を身につけたのではなく、この世界には鉄製の鎧も、騎馬の鎧も、鍛造の武具も存在しないのではないか。そして、その意味するところはひとつしかない。

「どうやら、俺達は恐ろしい世界に飛ばされたみたいだな」

河尻与兵衛がつぶやいた。その手には軍旗が握られていた。そこには、「漢」の文字が黒々と書かれている。

「漢、中国か。ということは、場所だけでなく、時間さえも飛ばされたということか」

森可成が、般若の面を取り、漢と書かれた軍旗を覗き込む。

「それは、間違いなさそうだ。どうやら、中国の今より一千年以上前の後漢と言われた時代に俺たちは飛ばされたようだな」

信長が、ある死体の側に膝まづきながら言った。その死体は兜をかぶらずに、頭部に黄色い頭巾のようなものを巻いていた。よく見ると死体には二種類あった。ひとつは、青を基調とした軍装の兵、もうひとつは黄色を基調とした軍装のもの。そして、死体は圧倒的に青い兵装のものが多く。

「なぜ、後漢とわかるのですか」

伊東清蔵が訊ねた。

「ああ、わかるさ、これを見ればな」

そう言っ、信長は黄色い頭巾の死体の横に転がっていた軍旗を拾い上げた。

そこには、黄色い布地に黒々ところ墨書してあった。

蒼天已死

黄夫当立

歳在甲子

天下大吉